

生存報告、
今日もわたしは生きてます
風司工房

わたしの生存報告

砂嵐のような雑音が絶えずポータブルラジオのスピーカーから流れてくる。
わたしはそれを折れそうに細い手で掴んで、頭上に掲げ、その時を待つ。
強い風が幾度も抜け、亡くなった母親のリボン付きの深緑のワンピースの袖口が
大きくはためくけれど、じっと堪えてその僅かな時間待つ。
思えばいつもわたしは待つばかりだった。
この世界になってからバツサリと耳の後ろまでの長さに切ってしまった髪も、以
前は背中がちくちくとするまで放っておいた方だった。

「あ……」
周波数が変化する。
空はずっと灰色と紫の混ざった雲が細くなってももの凄いスピードで流れていくの
に、その瞬間だけ、世界を二つに割ったみたいに青空が覗く。

刹那、彼の声流れ出す。
『ただ今三時。みなさん、元気ですか？ 僕は今日も生きてます』
けれど彼の声はすぐ砂嵐に呑み込まれて、あと十二時間は聴こえない。
わたしは脱力したように持ち上げていたラジオを下ろすと、細い鉄の棒が突き出
したコンクリ片に座り込み、へたって顔を覆う。
それは毎日三時にだけ流れる、名も知らない誰かの生存報告だった。
ずっと瓦礫が広がる先に濃い紫色の波が迫るのを見やり、わたしはただ溜息をつ
いた。

「ただいま」
十度くらい斜めに入り口が傾いた建物の中に入ると、補修作業中だったカーキ色
のエフロン姿の伯父が軽く手を挙げて出迎えてくれた。
「今日もラジオ入ったの？」

「うん、
（夕日に呼ばれてさうえまうか）」

かきすけういさう

小さく頷くだけで言葉は返さない。

懐中電灯にもなるといふポータブルラジオは元々は伯父の持ち物だったが、電波障害で殆ど使えなくなったからと、わたしにくれたものだ。赤い毛糸を輪っかにして通し、首からぶら下げて無くさないようにしている。

「一応ほかも他のコミニティと連絡が取れないかと思って無線飛ばしたりはしてるんだけどね、どういう訳だかあの日以来さっぱりなんだ」

「三時でも？」

「そのわずかな数秒の間に上手く互いに送受信しないといけないから、ちょっと難しいって話。こんな状態でずっと電源入れておく訳にもいかないし」

病院だった施設の一階は辛うじて残っていたが、ホールやそこから伸びる通路には、怪我をしたり疲れて横になる人で溢れ返っているのが見える。

「炊き出し手伝ってくるね」

「ああ」

片方のレンズが外れた眼鏡で、伯父さんは笑う。あの日以来、わたしの周りの大

とちゅう

いっすう

うさぎ

人

は

みんな

笑顔

を

標準

顔

に

して

途

中

少し

屋根

が

崩

れ

た

廊

下

が

あり

そこ

を

超

え

る

と

大

き

な

キ

ッ

チ

ン

が

現

れ

る

電

気

で

は

な

く

ガ

ス

で

火

を

扱

う

よ

う

な

っ

て

い

た

か

ら

助

か

っ

た

と

、

給

食

セ

ン

タ

ー

を

首

に

な

っ

た

紀

藤

弥

生

が

言

っ

て

い

た

。

「

あら

糸

ち

ゃ

ん

。

今

日

の

放

送

終

わ

っ

た

の

？

」

え

え

。

無

事

に

「

わたし

の

返

事

に

弥

生

さ

ん

は

に

っ

こ

り

と

す

る

。

彼女

は

少

し

丸

く

な

っ

た

背

で

両

手

を

使

っ

て

巨

大

な

ス

チ

ール

寸

胴

の

中

身

を

か

き

混

ぜ

て

い

た

。

誰

も

が

不

安

な

こ

と

は

分

か

っ

て

い

た

か

ら

。

余

計

に

自

分

が

ま

だ

こ

こ

に

い

る

。

誰

も

が

不

安

な

こ

と

は

※降の
主目マーク部分の描字について、
シリーズ特性や想定読者の年齢層(小中学生)
などもあり、少しでも「一般通念上不適切」かつ
刺激が強いと感じられる描字については
修正のご提案をしております。
御作品については、リストカットなどの自殺未遂の
描字を「ト」にさせていただきました、
ごめいだけと幸いです。
お手数をあかけし、申し訳ございません。
どうぞ宜しくお願いいたします。

2021/06/18 16:41

ことが、いたたまれない。
バンドで覆った左の手首が、時折酷くヒリヒリとした。
「それじゃあじやがいもの皮むきお願いしようかね」
「分かりました」
スチールの長机の上の段ボール箱から拳大の芋を取り出すと、ピーラーを動かし始める。

何かをしていけば、何も考えなくていい。
けれどもどうせ剥くなら玉葱の方が良かったと、目元を擦りながら思った。

翌日は磁気嵐が酷くて、午後三時に外に出ることを許可してもらえなかった。
わたしは一人窓の外を見ながら、それでも約束の時になるのを待つ。ひよっとし
たらその瞬間だけ空が開くかも知れない。そうすれば今日もまた彼が生きているこ
とを確かめられる。

ポータブルラジオはずっと小さな砂嵐を流していた。もう一月ばかりダイアルを

触っていないそれは、ただ彼の生存報告を聞くだけに存在しているようなものだ。
亡くなった父親の形見になってしまったロレックスの、割れた盤面が三時差し
ていた。

今日は聞けない。また十二時間後だ。

それまで彼は生きているだろうか。

名前も知らない、ただ「生きています」という言葉で繋がるだけの、他人。

「ああ糸ちゃん、ここだったのか」

伯父さんは顔も満足に洗えていないみたいだ。鼻の頭に機械油を付けていたが、

本人は気づいているのだろうか。

「ラジオ、入らなかった」

「だろうね」

何だか両親を失って呆然としていたわたしを迎えに来てくれた時からそうだった
けれど、全てを分かり切ったような表情で、わたしの父のように声を荒げたりはし
ない。ただそんな伯父さんが一度だけ思い切りわたしを打ったことがあった。手首

を切り開こうとした、あの雨の酷い日だ。
「伯父さん」

「ん？ どうかしたかい？」

「弥生さんから聞いたんだけど、こんな状況でもラジオ放送できそうところって芝公園にあるタワーくらいだろうって言われて……」

そうか。という溜息にも似た頷きだった。

「他の電波塔は残っていないという話を、探索隊の人たちからは聞いたよ。昔にもっと高い電波塔も建てただけだね、あの災害で折れちゃったそうだ。真つ二つにね」

「……やっぱ駄目、かな」

それは彼の声を聞いた時から何度も口にしようとしてきた決意だった。

「伯父さんは困ったように後頭部を掻くと、わたしを見て、やはり困ったように苦笑した。」

「ぼくが一緒に行く、とは言ってあげられないのが伯父さんの限界だ」

危険なこととはしない、無理だと思ったらすぐに帰ってくる。あとは決して自分で命を絶とうとしないこと。
その三つの約束を伯父さんとして、わたしはかつて東京と呼ばれてた土地へと向かって旅立った。

背中には伯父さんが餞別に与えた登山用のしつかりとしたカーキ色のリュックを背負い、その上に寝袋が乗っている。非常食は何とか五日程度持たせるつもりでいたが、水は既に一本が空になってしまっていた。生水は煮沸しないで飲まないよと言われたけれど、このままだと構わずに飲んでしまうかも知れない。

最初の日は傾いた駅舎の中で震えながら一晩を過ごした。

そんな状況でも帰る気にならなかったのは、午後と午前の三時に、彼の生存報告を聞くことが出来たからだ。

「今日も彼は生きている。」

「ただそれだけのことが、こんなにも疲れた心と手足に力を与える。病院を出てから五日目だった。」

わたしの目の前には大量の水とそこから伸びる傾いたビル等の建物が映っていた。そこはかつてこの国の一割以上の人間が生活を送っていた場所だったが、大災厄と呼ばれた謎の電波障害を発端とする未曾有の大災害により、その多くが失われたと聞いている。

実際に目にするまで半信半疑な気持ちがあったけれど、人の声どころか小鳥の囀りすら響かない、静寂の瓦礫の海を見て、現実だと受け入れるしかなかった。

リュックから地図を取り出してどこにそのタワーがあるのか確認しようとしたけれど、あまりにも地形が違い過ぎて全然参考にならない。

折角ここまでやってきたのに、正直「どうしよう」という感情しか出てこなかった。

それでも歩ける場所を辿りながら、わたしは進んだ。

「あ……」
横倒しになったビルの壁面を歩いてみると、遠くにボートから網を投げている人がいるのが見えた。

すぐに大声を出して呼びかけたのだけれど、久しぶり過ぎて何だかガラガラの掠れ声にしかない。

「す、み、ま、せーん！」

それでも何度か続いているうちに気づいてもらえたようで、

「あんたも生き残るか？」

ボートを近づけて話しかけてくれた。

「甲府から来たんですけど、赤い電波塔ってどこにありますか？」

「へえ、山梨の方からここまで？ あっちは無事だったんだ」

それに苦笑して首を横にすると、男性はバツが悪そうに「すまない」と謝った。

わたしはラジオ放送のことを手短に伝えたと、その男性は頬の無精髭を掻きながら

「もっと東だね」と教えてくれた。

「一応ここ、元は多摩川って呼ばれた川だったんだが、今じゃこの有様。聞いた話じゃ、東京湾付近は壊滅的な状況で、おそらく旧東京タワーも無事じゃないんじゃないかなあ。オレには分からんけど」

「ありがとうございます」
 お礼を言ってからアーモンドチョコレートをひと粒分けてあげ、わたしは再び歩き出す。
 それから時々人に遭遇した。彼らはそれぞれに優しく教えてくれて、わたしはその度にお礼のチョコレートを分けて感謝した。
 チョコの箱の中身がすつからかんになった頃、わたしの目はやっと遠くに目指す赤いタワーの先端を捉えることができた。
 あそこまで行けば彼に会える。
 ただそれだけのことが、へとへとになった体を突き動かしてくれた。
 押し流された大量の車の屋根を伝ってそのタワーが立っている根本までやってくると、日焼けした男性が一人、その入り口の前に立っていて、わたしの存在に気づくと掛けていたゴーグルを上げ、目を細めて怪訝な表情を浮かべた後で、
 「何？」
 素っ気ない呼びかけをわたしに投げた。

元？

その男性は島航大と自己紹介してくれた。この近所でキャンプを張っていて、今からこの鉄塔の上ですることがあるらしい。
 わたしはとどころが錆びて脆くなった階段を一段一段上がりながら、幾つかの染みがあるままになっている白シャツの、筋肉質な背中を見上げていた。千切れ袖から伸びるがっちりした右腕には擦り傷が見えたが、それはわたしの目を引くほど目立つほど目立ってはいなかった。
 「無理して付いてこなくていいんだけど」
 途中の踊り場で立ち止まって振り返った彼は、息の荒いわたしを一瞥する。
 「いきます。大丈夫ですから」
 一秒くらいじっと見たけれど、何も言わずに背を向けて再び彼は登り始めた。階段は大展望台まで六百もあるらしい。そこから先は更に梯子に登ることになると言っていた。
 「あ、あの」
 ちょうど真ん中を超えた辺りで、思い切って声を掛けてみる。

タリ
ハッ、

彼は少し歩みを緩めたが、振り返ったりはしない。そのままリズム良く赤い塗装が部分的に剥けた階段を登り続ける。

「わたし、ここまでずっと、ある人のラジオ放送だけを支えにやってきたんです」
もしかしたら、という予感だった。けれど島航大は歩みを止めることなく登る。

そこには何が起こっても揺るがないという彼の信念めいた決意を感じ取ることができた。

心臓が高鳴る。

苦しい。けどそれは、生きているからこそ感じられるものだ。

「もうすぐ三時になるからですか？」

彼は答えない。

顔を上げると、彼の背の先に灰色の大きな扉が見えた。

彼はドアの前で立ち止まってわたしが上がるまで待つと、何か言いたそうな顔を向けた後で、ゆっくりとドアノブを回した。

扉の先には空が広がっていた。

そこにあっちははずのガラスは全て割れていて、足元に破片が散らばっている。彼はそれに気をつけてと言うが、わたしを待つつもりなんかないみたいになささと別の階段に向かう。

以前ならここから沢山のビル群が、木々のように立っているのが見えたのだろう。わたしは窓際まで歩いて行きたくなかったけれど、不意に向かってきた突風に押し返され、怖くけてしまった。

「あの、すみません」

彼は一段高いところでハッチのような鉄製のドアを開けている。

そこには簡素なスチール製の梯子があったが、どう考えてもリュックを背負った自分のような細い腕の女が登っていきえるとは思えない。

「すぐ終わるからここで待ってな」

わたしはそれを拒否して無理やりにでもついていく覚悟ができず、黙って頷くとその場にへたり込んだ。

きい、と甲高い音を立ててドアが閉じていく。
たん、たん、と一定のテンポで彼の梯子を登る音が刻まれ始めるが、それもすぐに聴こえなくなり、わたしとリュック、そしてポータブルラジオだけがその場に残された。

何度も風が抜けていく。

その中には砂粒も混ざっていて、わたしは口の中に入ったジャリジャリを噛み締めながら、その場に顔を伏した。こんな時は昔みたいにもっと長い髪の毛のままでいれば良かったと思う。けどいつまでもあの頃を引き摺っているみたいで、たぶんそんな自分を鏡で見る度に悲しくなるだけだろう。

あ……。

もうすぐ三時だった。

わたしは中央の階段の傍に身を寄せて風を避けると、ポータブルラジオをセットする。ざりざりと砂嵐の音をさせたが、それが途切れ途切れになり、やがて、彼の声が流れ出した。

なみだ

『ただ今三時。みなさん、元気ですか？ 僕は今日も生きてます』

「わたしも、生きてます。ちゃんと生きて、会いに来ました」

それはいつも聴いているものよりも声に温かみがあって、わたしの目からは自然と涙が落ちていた。

五分くらい待ったろうか。

「終わった」

ドアを開けて出てきた彼はそれだけ言うと、再び無言で登ってきた階段を降り始める。

「あの！」

わたしは慌てて立ち上がり彼を追いかける。

「あのさ」

その彼は何故か階段に続くドアを開けたままで立ち止まり、わたしを見ると、小さく首を振り、こう続けた。

「俺はたぶんあんたが探している人間じゃないからな」

おい
おい

タワーを降りると、彼は何も説明せずにただわたしに付いてくるようにと言った。歩きながらあの震災から彼がどんな風に生き延びて、ここで一人暮らししているのか話してくれたが、概ねわたしたちとそう変わらない状況の中を、今日まで何とか命を繋いだみたいだった。

ほどなくして、ブルーシートを屋根にした即席の住処が見えてくる。

「ベッドだけはまともなものがある」

そう言った彼は、少しだけ表情を柔らかくした。

一時間ほど、彼が空き家から運んできたというパイプベッドの上で目を閉じて休ませてもらった。

ずっと慣れない一人旅と寝袋での睡眠は思いの外、自分の体を疲弊させていたみたいで、いつものように両親が亡くなった時の夢を見ないままぐっすり眠り込んでしまった。

パチパチ、という何かが焼ける音と共にその芳しさが、胃袋をきゅっと締め上げ

た。

「起きた？」

外はすっかり夜で、バラックの外では彼が焚き火をしながら串に突き刺した魚を炙っていた。

「それ、何ですか」

もともとベッドから起き出して焼かれている魚を見たが、秋刀魚や鯖、鮭のような、わたしの家庭でよく出ていたものとは全然違う。

「イサキと、今日はカワハギが取れた」

顔のむすっとした方がカワハギで釣るのが大変なんだと言われたけれど、魚釣りの経験がないわたしにはよく分からなかったし、カワハギは少し見た目が怖いなどしか思えなかった。

それでも「旨いんだよ」と言われ、串に刺さったそれを受け取ると、一口皮の上から齧りつく。

久しぶりに食べるちゃんとしたものだから、という訳ではなく、口の中に脂のよ

く乗った塩味が広まると、自然と涙が滲んでしまう。
「そんなに旨かった?」

わたしは口の中にカワハギを入れたままただ首を横に振ることしかできず、暫く
嗚咽しそうになるのを堪えながらそれをよく嚙んで吞み込むと、彼に向き直った。

「生きてるって、改めて思っちゃったから」

それからわたしは彼に自分が一度自らの命を絶とうとしたことについて話した。

左腕に巻いたバンドを捲ると、そこには無数の躊躇い傷に混ざってくつきりと赤
く腫れ上がった線が目立つ。かつてわたしが命を諦めた跡だった。

「大災厄で両親が亡くなって、大好きな友達もみんないなくなって、あの日、わた
しの世界は終わりました」

彼はわたしの告白をただ黙って焼けたイサキを齧りながら、相槌もなく聞いてく
れた。

「何をしても生きてる心地がなく、食べることすらどうでもよくなって、ただ朝と
夜を繰り返すだけの日々を、さよならしたくなったんです」

目を閉じれば、今でもあの時のことを映像付きで思い出せる。

自分で命を絶とうとしたところを助けられ、それでもまだ何度も諦めかけていた
時だった。ずっと砂嵐が聴こえていたのに、それが一瞬晴れた。

見上げた空は久しぶりの青で、そんなわたしに彼の声が降ってきた。

「どこまでも抜けていくような綺麗な男性の声でした。ただ今三時。みなさん、元
気ですか? 僕は今日も生きてます。たったそれだけの、けれどわたしにとっては

枯れかけていた心に触れて水を注いでくれた、命の言葉でした」

そこまで言うと彼は初めて頷きを見せ、わたしがずっと尋ねたいと思っていた言
葉を口にするのを待ってくれた。

「あなたがその、生存報告の彼じゃないんですか?」

彼は黙っている。

「さっきそのラジオ放送をしに、タワーに登ったんですよ?」

何かを考えるように手にしたイサキの串を地面に突き刺すと、小さく溜息を切る。

「違うん、ですか?」

彼はじつとわたしを見てから、最後の質問にだけ一つ頷いた。

「それじゃあさつきは何をしていたんです？ あなたが放送したんじゃないかなら何だって言うんですか？ わたしはあなたに会う為に、あなたに会ってわたしも生きてますって伝える為だけにここまで来たんですよ！」

目の前のこの男性がその人であって欲しいという、わたしのただの願望だということとは理解していた。けれどそれでも僅かな偶然と奇跡に縋りたかった。だってそうでもないかと、わたしはただの馬鹿な人間じゃないか。

「彼は……大垣条志はもういない」

その言葉で、心臓が止まりそうになる。

「大垣条志は俺の仕事の先輩でね、みんなからはジョージと呼ばれてたよ。彼はあの大災厄の後に集まった人々の希望の柱になってくれたんだ。さつき話したと思うが、あんな状況で誰もがそれぞれに手を取り合って助け合える、なんて理想はここにはなかった。強い者が弱い者から奪い、暴力によって支配され、絶望して命を絶つ人間も沢山いた」

淡々とした語り口だったが、彼の話で、わたしは随分と恵まれた環境だったのだと理解する。

「そんな状況を救ってくれたのが、彼、大垣条志だった。ジョージが間に入って、時には拳も使ったけれど、みんなを説得して回り、希望を持って生きていくことができるようになった」

彼は小さくなった焚き火からランタンに火を取ると、歪んだバケツに汲んでおいた水をかけた。

「そのジョージがね、他にも同じような思いをしている奴らがいるはずだから、その支えになるようなことをしたいって言い出した。ちやうど俺が他のコミュニティとの連絡手段を模索している時に午前と午後の三時にだけ電波が通ることを発見して、言ってみただよ。ラジオを、流さないかって」

わたしの瞳には、自然と涙が浮かんでいた。ランタンで彼が先導してくれるのを頼りに、慎重に梯子を登る。晩御飯に食べたカワハギとイサキのお陰か、握る手にもしっかり力を入れられた

「ここだ……」

最後に彼の手に引っ張ってもらって放送設備のあるデッキに上がると、スチール製の赤いドアを開け、その中に押し込まれた。

風の音が耳を裂くほどに強い。

まだアナログ波を流していた時代の機械が残っていると説明されたが、目の前のメーターやスイッチのどれがそうなのか、わたしにはよく分からない。

ただその機械の前にあるカセットテープと呼ばれる穴の開いた小さな箱に、彼、大垣条志が声を吹き込んでいったと聞いていた。

電源を確認した彼は、マイクから直接放送できるように設定していく。わたしはそれを見ながら緊張を何とか胸の奥に押しやろうとがんばった。

アナログ時計の秒針が間もなく頂点に重なる。

「ランプが赤になったらこのマイクに向かって喋り始めて。時間は十秒程度しかないから」

わたしは一つ頷くと、首から下げたポータブルラジオを抱きしめた。

半球状のランプが、赤になる。

思い切り息を吸い込む。

それからわたしは、この世界のどこかでみんなに生きる力を与えようとしている大垣条志に届けと願いを込めて、声を絞り出した。

「ただ今三時です。みなさん元気、ですか？ わたしは今日も、ちゃんと生きてます」